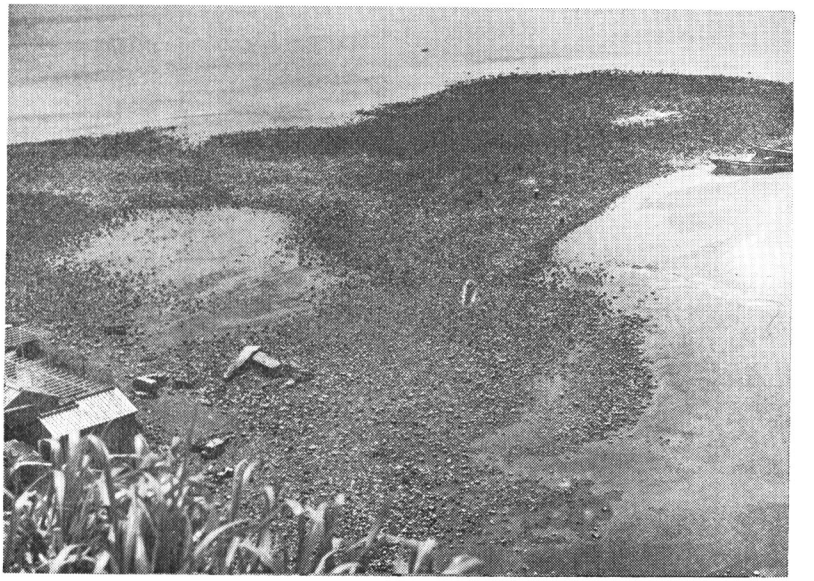


和賀江嶋　鎌倉市

治元年（一二四〇）には、盗人・旅人・辻捕（辻で女を捕える痴漢）・悪党などの検察、町辻での売買、辻々の盲法師（辻芸人）・辻相撲、押買（押売り）などの取締りを職務とした保奉行を設けた。保奉行の管轄する保は京都左右両京の保をならったものである。同時に、京都の篝屋にならい、鎌倉の要所要所に篝屋を造って保内の在家人に番をつくって火を焚かせて夜中警固に当たらせた。都市的犯罪の増加を物語るものである。このころ若宮大路下の下馬橋付近の好色の家（飲み屋）で、酒宴乱舞のあげく、三浦氏と小山氏の武士が喧嘩に及び、あわや一大事になろうとし、執権北条泰時の直接のはからいで鎮められた事件さえ起こっている。建長四年（一二五二）幕府は、鎌倉や諸国にむけて酒造りや、酒の売買も禁止するため、鎌倉中の酒壺を数えさせたところ、三万七千二百八十四個もあった。保奉行は、在家一軒に一個を認めて、他を破壊させた。しかも認めた酒

©神奈川県立公文書館

壺も酒以外に用いなければならないとした。鎌倉市中の泥酔者の横行が思い知られる。

保奉行人は、鎌倉中にたむろする浮浪人を追放する役目もあった。この追放作戦は何度も行われたが、これも鎌倉の都市的一面を示すものであろう。建長三年十二月、これまで自由であった商人の営業地を定めたことがある。この場所を大町・小町・米町・亀谷の辻・和賀江・気和飛（化粧）坂山上とした。この町には、牛を小路につなぐな、小路の掃除をよくせよとも命じている。小路の混雑や、道路のゴミを防ぐためである。文永二年（一二六五）に、亀谷辻、気和比坂上、和賀江に代わって、魚町・武蔵大路下・須地賀江橋が町屋に加えられ、押買・立商人（行商や路上での商人）・迎買（運送中の荷を規定以外の場所で買いとる）を禁止し、建長五年七月には、とりわけ高値であった炭・薪・萱木・藁・糠の五品の公定価格を定めた。この五品は、武士の必需品（馬糧・燃料）である。

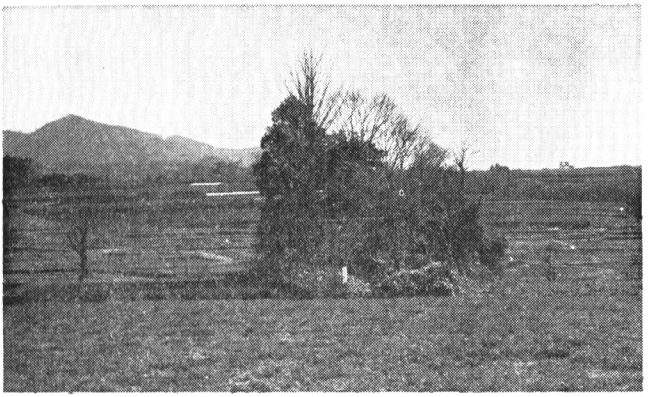
（二）栄える鎌倉文化

京下りの文化

源頼朝は幕府を開くに当たって、京都から大江広元・三善康信らを招いて政治機関として公文所や政所をつくらせ、政務に当たらせた。武家政治を京風の仕組みで行おうとしたのである。彼は、しばしば管弦詠歌の会合を御家人と共に催して、御家人も舞曲に通じていたことを示している。恐らくそ

©神奈川県立公文書館

の舞曲は、東国自生のものでなく、平家時代内裏大番役で上洛中に習いおぼえたものであろう。建久二年（一一九一）頼朝は、多好方・好節ら京の楽人を鎌倉に招いてその技を伝えさせ、好方らが帰京すると、大江久家ら十三人を京都に留学させて好方に学ばせる熱心さである。二代将軍頼家は蹴鞠を好んで、そのため政務を顧みないと非難され、伊豆に幽閉される理由となったほどである。三代将軍実朝も好んで、京都から蹴鞠書を贈られているが、実朝は和歌にも熱心で、はるばる京都の藤原定家の指導をうけ、数多くの名歌をのこしたことは有名である。その歌は「金槐和歌集」として今日に伝えられている。また芸能者を選んで学問所番を編成して和歌や中国の故事を語らせたが、その中には北条時房、泰時ら十八名の武士が加えられている。源氏断絶後、京都から迎えられた四代将軍頼経も、小侍所の近習者に書道・弓馬・蹴鞠・管弦・郢曲に堪能な者を加えた。泰時以後の執権・連署には、その和歌が勅撰和歌集に採録されるものが少なくないが、これも京文化の影響である。



実朝の首塚　秦野市

頼朝は、神仏の信仰が厚かったが、その外陰陽道・宿曜道の祭も盛んに行った。そのため多数の陰陽師らが鎌倉に住みついた。

©神奈川県立公文書館

蘭渓道隆　建長寺蔵

兀菴普寧　正伝寺蔵

明庵栄西　寿福寺蔵

こうした京下りの文化は、金沢実時の金沢文庫の経営に至って、学術的文化の緒をひらくことになった。この文庫は、北条氏の一族金沢実時が建治元年（一二七五）ころ金沢の地（横浜市金沢区）に開設し、実時・顕時・貞顕の三代にわたって、京都の清原家から経書の伝授をうけ、公家からは国書の書写をうけて、これを金沢文庫に収蔵した。今日知られている金沢文庫本と称せられるこれらの漢籍・国書は、二百五種に及んでいる。その範囲は政治・法制・農政・軍学・文学の広範囲に及び、金沢氏がひろい分野にわたって京都の学問を鎌倉に移そうとしたことがうかがわれる。

仏教文化

鎌倉文化は武家文化といわれるが、別に寺社文化ともいわれるほど、宗教文化も盛んである。頼朝のとき、勝長寿院等の三大寺が建てられたが、その後も将軍や執権による寺院の建立が相ついだ。中国から伝えられた禅宗も、すでに頼朝のひらいた寿福寺の開山に栄西が迎えられるなど、開幕当初からあり、京都東福寺の開山円爾も数回にわたって鎌倉に下向、

©神奈川県立公文書館

道元も鎌倉に来て説法を行った。彼らを迎えるものは執権以下の武士たちであり、やがて積極的に中国から禅僧を迎え一寺をひらく。北条時頼が、蘭渓道隆を迎えて建長寺をひらき、北条時宗は、無学祖元を宋から招いて円覚寺をひらいた。建長寺二世兀菴普寧、建長寺・寿福寺・円覚寺に歴住した大休正念など、いずれも執権の招いた宋僧である。これら高僧の寺々には多くの修行僧が集まり、円覚寺は僧百人、行者・人工百人の外に雑役者五十人を定員とし、建長寺の僧は二千を数えたであろうとされている。彼らの生活はもちろん禅宗の制規に従い、天台・真言の旧寺院風ではない。新しく禅宗風の日常生活の生活具が大量に必要となる。由比ケ浜や和賀江島は、そうした宋風生活具の揚陸地としても利用され、禅宗風による文化が展開した。絵画や彫刻における頂相、不立文字を唱えながらも特殊な発達を示した文学、建築における唐様などであり、喫茶の風習も禅僧によって、ひろめられた。

異国風の禅宗に対し、旧仏教から生まれた日本新宗教も、早く東国に及んだ。正治二年（一二〇〇）、鎌倉で念仏僧の黒衣を禁じ、黒衣を焼却した。将軍頼家は黒衣を憎んで、念仏僧を捕え、念仏を禁じた。京都で専修念仏が停止され法然以下、流罪や斬罪が行われるより七年も前のことである。にもかかわらず、東国武士で法然の下に参ずるもの跡をたたず、石川（藤沢市石川）の道遍は、法然から教えをうけて帰国してその道を守り、宝治合戦（一二四七）に三浦氏と運命を共にした評定衆毛利西阿は専修念仏者であった。この西阿は安貞元年（一二二七）、重ねての専修念仏停止によって陸奥に流されて相模国を通過した法然の一の弟子隆寛をその所領厚木の飯山光福

©神奈川県立公文書館

鎌倉入りをこころみる一遍上人「一遍上人絵伝」から京都府　歓喜光寺蔵

寺にとめて、その最期を見守った。その弟子智慶はさかんに浄土宗を東国にひろめた。同じ念仏者である一遍が、奥州に祖父河野通信の墓に詣でての帰途、巨福呂坂から鎌倉入りを試みたのも、こうした雰囲気を背景にしたものであろう。北条時宗に拒まれて鎌倉入りができず、片瀬で数日踊り念仏を行い、西へ去ったが、乾元元年（一三〇二）一遍の弟子真教が、相模の当麻（相模原市）に無量光寺をひらいて、遊行聖の地位を智得にゆずって、独住した。真教は独住後も積極的な布教を行って、百近い道場を関東にひらき、北条氏一族をはじめ幕府の重臣などを信者とした。京都の公卿から上洛をすすめられた返事に「関東の荒武者どもにとりこめられ、身の暇をゆるされず候」とのべたほどである。真教に遊行聖の地位をゆずられた智得のあとをついだのは呑海である。彼は俣野荘（横浜市戸塚区と藤沢市にまたがる）の地頭の弟で、智得の死後、正中二年（一三二五）武蔵芝生宿（横浜市西区）で遊行聖を安国にゆずり、藤沢に清浄光寺をひらいた。この寺は呑海以後の遊行

©神奈川県立公文書館

竜口寺　藤沢市

上人の引退後の寺となり、鎌倉に近いところから、武士たちが念仏に集まり、鎌倉幕府滅亡の際には、寄せ手の新田勢も、守る北条勢もともに念仏を唱えながら戦い、道場の僧はみな浜に出かけて、念仏者には念仏をすすめて往生をとげさせたので、これを見聞した人たちの念仏の信心は一層盛んになった、と報じられた。

こうした念仏の流行に対し、念仏無間を唱えて、安房の清澄寺を追われて鎌倉に来て、名越の松葉谷に草庵を構えて辻説法を始めたのは日蓮で、建長五年（一二五三）のことである。彼は文応元年（一二六〇）、『立正安国論』を著し、執権時頼に献じたが反応なく、かえってこの年念仏者によって草庵を襲撃された。日蓮は危く難をのがれ、すでに信者となっていた下総の武士富木常忍の下に身をよせたが、翌年には再び鎌倉に出て、念仏のみでなく禅・真言・律の攻撃をはげしく行った。いずれも鎌倉において幕府や執権

©神奈川県立公文書館

らを信者とする宗派であり、ために日蓮は捕えられ、竜口（藤沢市）の法難に遭い、奇蹟的に斬首を免れて、佐渡に流されるが、文永十一年（一二七四）には赦免されて鎌倉にかえり、内管領平頼綱に自己の信念を説いたが顧みられず、ついに五月十二日鎌倉を去って、信者甲斐の南部氏の所領である甲斐身延山中に退去した。ここから書信をもって布教をつゞけ、下総・武蔵・駿河・佐渡や鎌倉に教線を拡大すること九年、弘安五年（一二八二）病がすすみ、周辺のすすめで、南部氏の所領常陸の温泉に湯治に赴く途中、武蔵千束郷（東京都大田区）池上宗仲の館で没した。今の池上の本門寺がその地である。

こうして親鸞を除く鎌倉新仏教の宗祖やその後継者は、鎌倉を目指して県下を往来した。だが幕府や、将軍や国家の安全祈願を行うのは、天台・真言の旧仏教によっており、とくに山門・寺門（園城寺）の僧侶を招いて、鶴岡八幡宮の供僧・別当に補し、金沢氏の菩提寺称名寺では、西大寺叡尊の鎌倉行化を契機に、西大寺流律寺となって、好学金沢氏の外護の下に大いに教学がおこった。初代長老の審海、二代剱阿、三代湛叡らの教学研究の成果は、今日おびただしい仏書として、金沢文庫に伝えられている。叡尊の弟子忍性も、極楽寺において大いに律宗を宣揚し、聖徳太子を追慕して、諸所に療病所を設け、病者を加療治癒すること四万六千八百人に及んだ。また日本最初の馬病舎を坂ノ下に設け、慈悲を動物にまで及ぼし、さすがの日蓮も「極楽寺の良観上人は、上一人より下万人に至るまで、生身の如来とこれを仰ぎ奉る」ことをみとめている。北条貞時の覚園寺、飯山の清浄金剛寺、いずれも諸宗兼学ながら、戒律復興の拠点となった。相模は、禅宗一色になったわけではない。

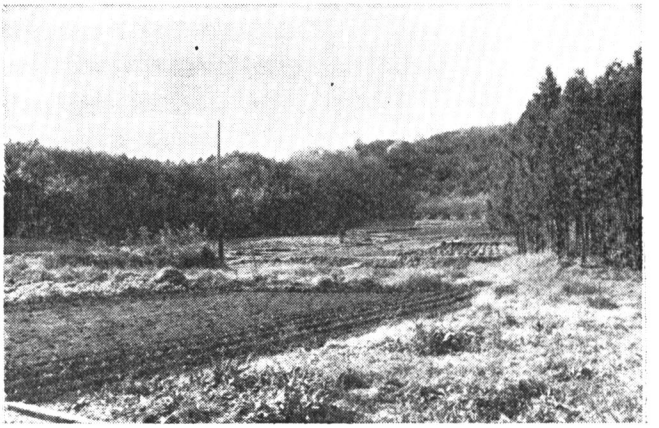
©神奈川県立公文書館

(三)　相模に消え去る武士たち

相模武士の風土

平安時代の末に相武の地に多くの開発領主があらわれ、鎌倉幕府の創業に参加した。彼らの系譜にはおよそ三系統がある。その一は三浦氏である。その勢力は三浦半島を基盤として西は相模の中央部へ、東は浦賀水道を越えて安房に及び、相模武士団中の最大級である。系図の上では桓武平氏高望の子孫というが、本来は古代以来三浦半島に根をはった古代豪族で、十一、二世紀ごろ関東平氏と関係ができて改姓したものと思われる。家祖としてたしかな人物は、後三年役に源義家に従った平為次で、その子義継と義明は三浦荘司を名乗り、相模国衙の官人と共に大庭御厨停廃事件に加わっている。義明は、在庁官人ともなって、以後代々三浦介と称した。義明の弟義実は、大住郡岡崎（平塚市）を本拠として岡崎四郎を名乗り、中村荘司中村宗平の娘を娶って佐奈田（平塚市真田）・土屋（平塚市土屋）を名字とする家を分出した。義実の甥為綱は、三浦半島の芦名を名字としたが、愛甲郡石田（伊勢原市）に石田氏を分出した。義明は、頼朝の挙兵にいち早く応じて三浦半島を出発したが、風雨に妨げられて間に合わず、引き返す途中、畠山氏に攻められ戦死したが、その子義澄らは安房にのがれて頼朝に合流した。以後三浦一族は、頼朝挙兵以来の功臣として幕府に重きをなした。初代の侍所別当和田義盛も、三浦半島和田の地を名字とした義明の孫である。

©神奈川県立公文書館



中村氏館跡　小田原市

東の三浦氏に対し、西に繁延したのが中村荘（小田原市東部と中井町一帯）の荘司中村氏である。中村氏も桓武平氏を称するが、たしかな人物としては、例の大庭御厨事件に、三浦義明と協同した中村荘司平宗平である。宗平の長男重平は中村荘を相続し、次男実平は土肥郷（湯河原町一帯）に分出して土肥氏を名乗り、三男宗遠は、土屋（平塚市土屋）に分出して土屋氏を、四男友平は二宮河匂（かわわ）荘（二宮町）を与えられ二宮氏を、五男頼平は、中村荘の北方堺に分出して堺氏を称した。石橋山合戦に敗れた頼朝を安房に脱出させた土肥実平の功は大きく、頼朝の信頼は厚かった。

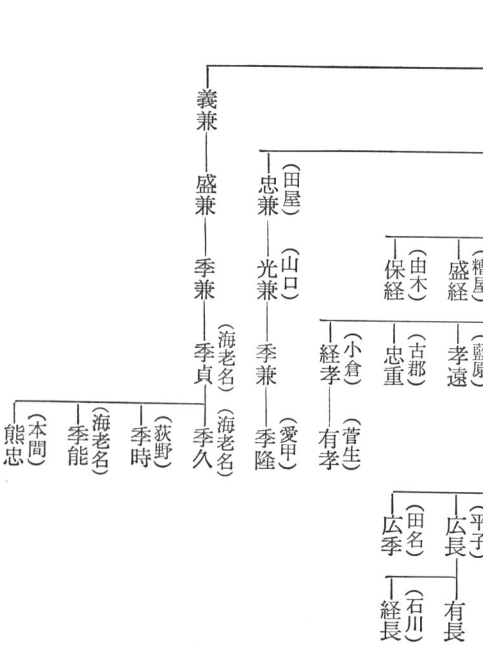
三浦・中村両氏の間に繁延したのは、鎌倉党の面々である。系図では桓武平氏と伝えるが、党とよばれていることは、複数の氏の集団であることを示す。その一は藤原姓で、前九年役に源頼義に従った鎌倉権大夫藤原景通（かげみち）の系統である。その二は大庭御厨の開発領主平景正（景政）の系統で、後三年の役に源義家に従って勇者ぶりを示した鎌倉権五郎景政（景正）である。景政の子孫が大庭景能・景親兄弟で、兄は平氏軍を率いて石橋山に頼朝を破り、弟は頼朝に従って鎌倉の頼朝邸の建築奉行をつ

©神奈川県立公文書館

とめた。末弟の景久は高座郡俣野を名字とし、彼らの叔父景弘は高座郡長尾を名字とし、後、関東管領上杉氏の家宰長尾氏となったともいわれる。鎌倉市梶原を名字とし、頼朝に重用された梶原景時もこの一族である。

県央から西北部にひろがる秦野盆地には、波多野一族が繁延した。この一族は藤原姓を名乗るが、本来は佐伯氏で、源頼義に三十年余も従者として仕え、前九年の役で頼義に殉じて戦死した佐伯経範の子孫とされている。秦野盆地の摂関家領の波多野荘を開発し、酒匂川流域にも進出して、河村郷・松田郷・大友郷などに一族が繁延して、松田・大槻（秦野市）・河村・大友・沼田（南足柄市）の諸氏を分出した。早川荘（小田原市）に所領をもった山内首藤氏も波多野氏の祖経範の兄公清の末という説がある（カッコ内は分出地、以下同じ）。

横山党系図（武蔵七党系図・本間系図）



現在の伊勢原市一帯を占める糟屋荘の荘司糟屋氏も藤原姓を称しているが、これも前九年の役に頼義に従った坂東の精兵佐伯元方の子孫である。糟屋・四宮（平塚市）・城所（平塚市）らの諸氏を分出した。

©神奈川県立公文書館

県北の多摩丘陵地帯には、横山党が進出していた。この党は、東京都八王子市横山を名字の地とし、小野氏を本姓とした武蔵国の国衙の官人で、前九年の役に頼義に従った横山野太夫経兼はその祖である。永久元年（一一一三）、内記太郎を殺した罪で、横山党二十余人の追討令が相模・武蔵・上野・下野・上総の五か国に下された。横山党の勢力のほどがうかがわれる。この党からは、海老名・愛甲・荻野・本間（厚木市）・平子（横浜市）・石川（横浜市）・小倉（川崎市）・菅生（川崎市）・井田（川崎市）の諸氏が分出した。

県北の武蔵三郡には、この外に埼玉県秩父郡に根拠をもつ秩父氏から分出した諸氏がある。秩父氏は桓武平氏と称するが、本来は古代の秩父国造家の系譜をひくものであろう。この秩父氏からは、畠山・河越・葛西・豊島・江戸らの有力武士を分出し、県下に及んで河崎（川崎市）・小山田（町田市・川崎市にまたがる小山田荘）・稲毛（川崎市）・榛谷（はりがや）（横浜市）の各氏を分出し、さらに相模国の大名といわれた渋谷（大和市）氏も、この氏である。

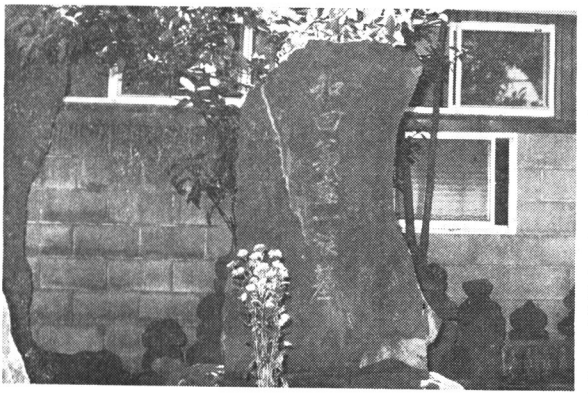
以上、鎌倉幕府草創期に活躍した武士のほとんどが、古くからの現地の豪族で、源頼義以来源氏との関係をもったものである。京下りでは、僅かに大江広元が頼朝に与えられた毛利荘（厚木市）を領した毛利氏、大友荘を与えられた中原親能の大友氏ぐらいのものである。

相模に消え去る武士たち

東国の政権樹立の主動力となった相模の武士たちも、頼朝を自家薬籠（じかやくろう）のものとした伊豆の小土豪北条氏のため次々と相武の地に抹殺され、武士はその所領の全国的拡散につれて、相模国の本名の地よりも、他国にその家をとどめるものが少なくなかった。

©神奈川県立公文書館

前者の最初の犠牲者は、梶原景時である。頼朝一の郎等といわれた彼は、頼朝の死後、北条政子の妹で八幡（後の実朝）の乳母阿波局にそそのかされた三浦義村・和田義盛・小山朝光ら有力御家人六十六人に排斥されて鎌倉を追放され、その所領相模一宮にたてこもり、京都に活路を求めて、正治二年（一二〇〇）相模国を出たが、駿河国清見関（静岡県）付近で、付近の武士におそわれ、一家もろとも殺された。



和田塚　鎌倉市

次は和田一族である。建保元年（一二一三）北条義時は、伊豆に幽閉し殺害した頼家の遺児を擁立する陰謀が発覚したと流言を放ち、和田義盛の子らをその一味として捕え、和田義盛を挑発した。義盛は一族親族に檄をとばして義時を攻め、一時は有勢だったが、三浦義村の寝返りのため敗北し、和田一族、横山党の横山・粟飯原・古郡・屋那井・土屋、山内党の山内・岡崎・由井・高井・大多和・大方・成山・高柳・土肥・渋谷・毛利、鎌倉党の梶原・宇佐美・愛甲・金子・逸見・海老名・荻野・六浦・松田・相田・波多野・塩谷・白根・佐奈田・津久井の人々が討死し、その所領は没収されて、北条義時以下の戦功者に与えられた。討つも討たるも相武の武士ではあったが、消え去る者が多かった。加えて和田義盛の侍所別当職は義時が任ぜられ、義時はこれまでの政所別当をも兼ねて、幕府政治機構

©神奈川県立公文書館

の最高のポストを占めた。その地位は、北条氏の嫡子によって世襲され、得宗専制政治にふみ出すことになった。

次は宝治元年（一二四七）の事件である。和田の乱で北条氏に寝返りした三浦氏は、北条氏の外戚ともなって勢力を振ったが、このころ、北条氏と結んで勢力をたかめた御家人安達景盛とその外孫北条経時との権力闘争に敗れ、頼朝の法華堂において、当主の泰村以下五百余人が自殺した。その人々は、泰村一族をはじめ、高井・佐原・長江・下総・佐貫・稲毛・臼井・波多野・宇都宮・春日部・関・多々良・石田・印東・平塚・平塚（土用）・佐野・得富・榛谷・長尾・秋庭・岡本・橘の諸氏、生虜となった者、金持・毛利・豊田・長尾・大須賀の人々である。和田の乱で生きのこった相模武士は、再度の打撃をうけただけでなく、犠牲の範囲は、下総にも及んだ。

相武の御家人に最後のとどめをさしたのは、弘安八年（一二八五）の霜月騒動である。古代の武蔵国足立郡の郡司家の末と思われる御家人安達泰盛が、内管領（得宗家の管領）平頼綱に中傷されて、滅ぼされたが、泰盛と共に自害した者は、安達一門をはじめ、大曽禰・伴野・小笠原・殖田・小早河・三科・葦名・足立・懐島・綱島・池上・行方・二階堂らで、信濃国にも及び、この外武蔵・上野、はるか遠く筑前の武藤氏まで巻き添えをくって、自害者五百人と注進されている。注目されるのは、この騒動で相模の武士は、これまでに比べると少ない。

鎌倉幕府は、北条義時以来、北条氏の執権政治となって、その専制の度をたかめたが、その根底にはこうした相武御家人の排除があったことを見逃せない。だがこの北条氏も、元弘三年（一三三三）、後醍醐天皇の指令をうけた関東武士によって、相模にその姿を消すのである。

©神奈川県立公文書館

しかし一方では、相武の武士は、源平合戦、承久の乱を通じて、幕府方に没収された敵方の所領を戦功の賞として充てがわれて、相武御家人の所領が全国的にひろまり、それらの所領に庶流が定着し、本家は相模にその姿を消しても、地方に栄えた武士も少くない。越後（新潟県）の三浦和田氏、安芸（広島県）の毛利氏、小早川氏、豊後の大友氏、薩摩の入来院氏（渋谷氏）、越後の長尾氏（上杉氏）などは、その代表的なものである。

©神奈川県立公文書館

二　戦乱の世

(一)　鎌倉府の成立

足利尊氏鎌倉に叛す

元弘三年（一三三三）五月二十二日、百四十年間つづいた鎌倉幕府も、上野国新田荘から南下した新田義貞のため北条氏が亡ぼされると共に消滅した。この時三浦氏の一族、大多和義勝は、松田・河村・土肥・本間・渋谷の勢を率いて義貞を助けた。何回にもわたる北条氏のために除かれたにもかかわらず、相模武士は根強く生きのこっていたのである。これに反し北条氏は、信濃（しなの）（長野県）の諏訪（すわ）氏の下にのがれた北条時行を除いて、一族こぞって死を共にした。

北条氏を亡ぼした新田義貞は、京都の新政府に参加するため上洛した。代わって新政府は、足利尊氏の要請によって、尊氏の弟直義を相模守に任じ、後醍醐天皇の子成良親王を奉じて鎌倉に下向させた。直義は、成良親王の執権として、関東十か国を管轄した。鎌倉は、関東支配の府として再生したのである。ところが建武二年（一三三五）七月、北条時行が信濃に挙兵して武蔵国に進入し、迎えうつ足利直義を井出沢（町田市）に破った。直義は鎌倉に帰らず東海道を西走し、成良親王と、北条氏の人質として鎌倉に居た尊氏の長子義詮（よしあきら）も直義のあとを

©神奈川県立公文書館

追って西走した。鎌倉の二階堂に幽閉されていた護良親王が、直義の手の者によって殺されたのは、この時である。七月二十五日北条時行は鎌倉に入った。しかし三河国（愛知県）矢作宿で、来援した尊氏と合流した直義・義詮らは、そこから引き返して、八月十九日には鎌倉に時行を追いおとし、これを奪回した。時行の北条政権再興の夢は二十余日で終わった。

護良親王墓　鎌倉市　鎌倉宮

鎌倉に入った尊氏は、若宮大路の旧鎌倉将軍邸跡に新邸を造って住み、天皇の召還に応ぜず、新田義貞を追討すべきことを奏請した。天皇はこれを拒み、逆に義貞に尊氏追討を命じた。大軍を率いた義貞は、途中、足利方を破りながら東海道を進撃したが、十二月十二日竹ノ下（静岡県小山町）の戦に敗れて壊走した。十二月十五日、尊氏は西上を決意して、義詮を鎌倉にとどめ、直義とともに義貞軍を追撃して京都に迫った。建武新政府に叛いたのである。

尊氏が鎌倉を去って、十数日後に、尊氏追討の勅命をうけた奥州の北畠顕家の軍が鎌倉に入ったが、滞在する間もなく尊氏を追って西上した。京都に入った尊氏は、北畠勢を避けて九州に走り、そこで彼を迎え撃つ菊池勢を破って態勢をととのえ、瀬戸内海を東上し、摂津国（大阪府）湊川（神戸市）に新

©神奈川県立公文書館

田・楠木を破って、六月十四日光厳上皇を奉じて京都に入った。十二月二十一日、後醍醐天皇は吉野に脱出し、南北朝動乱がはじまる。

尊氏を京都から追い落として奥州に帰っていた北畠顕家は、延元二年（一三三七）八月、一万余の兵を率いて、再び西上の途についた。鎌倉にいた足利義詮は、上杉憲顕・細川和氏・源重茂をはじめ、武蔵・相模の兵八万騎をもって利根川に迎撃したが敗れ、顕家軍は鎌倉に突入し、飯島・杉本で合戦が行われたが、足利方が不利で、義詮は三浦高継に助けられて三浦半島にひそみ、約半年間、顕家は鎌倉を占拠して後西上したので、義詮は鎌倉に帰ることができた。高継の祖父盛時は、宝治の乱では北条方に加わり、乱後、三浦氏の惣領となり、時行の乱には、父時継は時行に加わって誅せられたが、高継は足利方として奮戦し、三浦三崎をはじめ多くの所領を与えられ、その子高通は、相模守護となり、相模第一の武家となった。

足利直義鎌倉に死す　足利尊氏は、はじめ北条氏の命をうけて、後醍醐軍討伐のため東国を出発する時、長男の義詮を人質として鎌倉にとどめておいた。義詮は、父が天皇側についたときも、北条氏が鎌倉で滅亡のときも、巧みに身を全うし、新田義貞以上に東国武士の人望を集めた。建武政府が崩壊して後も鎌倉に駐在して、関東における足利方の主となったが、貞和五年（南朝　正平四＝一三四九）、尊氏は義詮を京都に召し上げ、代わりに義詮の弟基氏を鎌倉に下し、上杉憲顕と高師冬とに補佐させた。

これより先、暦応元年（南朝　延元三＝一三三八）、尊氏は、北朝から征夷大将軍に任じられて、京都に室町幕

©神奈川県立公文書館

府をひらき、弟直義と共に政務に当たったが、やがて両者は不和となり、足利方は尊氏派、直義及び直冬派に分かれて争い、直義は南朝方に降って尊氏と戦うに至った。いわゆる観応（北朝方の年号）の擾乱である。鎌倉でも、尊氏派の高師冬が、基氏をおし立てて直義派の上杉憲顕を攻め、憲顕を鎌倉から追い出したが、基氏自身は本来直義派であったので、基氏に攻められて甲斐国（山梨県）須沢城で敗死した。師冬の死は直ちに中央に反映して尊氏と直義は和睦し、尊氏を動かしていた権臣高師直は上杉能憲に殺された。しかし、間もなく再び不和となり、直義は北国に奔り、ついで鎌倉に入った。尊氏は、急いで南朝と講和して直義討伐に向かい、相模早河尻（小田原市）で直義軍を破って鎌倉に入り、直義を降服させ、ついでこれを毒殺し、擾乱は終わった。尊氏はそのまま鎌倉にとどまったが、擾乱が収まると、再び南北朝の対立がたかまり、新田義貞の遺子義興・義宗らが、新田荘から、鎌倉目指して進撃した。これには直義派であった酒匂・松田・河村・小磯・大磯・酒間・山下・鎌倉・玉縄・梶原・四宮・三宮・高田・中村などの相模武士が加わった。これに対し鎌倉から出撃した尊氏軍には、畠山・仁木・

足利尊氏画像　集英社『図説日本の歴史』から

©神奈川県立公文書館